

戦争に取材せるお話 について

附屬幼稚園談話研究部員

支那事變の初め頃から、紀元二千六百年の頃にかけて、日本の童話は一大轉換を始めた。それは、戦争を契機として高唱せられた「古典への復歸」の餘波が幼児童話界にも及んだからであつた。即ち、古事記、日本書紀を主體とする、所謂「神様のお話」が幼児童話の中心となり、従來、可成りの位置を占めてゐた泰西童話は遙かに後退させられたのであつた。

「神様のお話」は童話研究の専門家により、又幼児教育の實際家により、或ひは又家庭にある母により、絶大なる關心を持たれ、熱心なる研究が積まれた。そして、それは一先づ或る程度の完成をみ、其の成果は非常な勢ひで幼児の間に滲透した。

聽て、支那事變は愈々擴大し、世界は動

亂し、遂に我が國に於ては、大東亞戦争の勃發をみたのである。此の間にあつて、文學界に於ては、戦争文學に關する論議が盛んに行はれ、作家の從軍がみられ、一先づ現地報告的文學が隆盛をなしたのであつた。

我が童話界に於ても、戦争中に於ける皇軍勇士の強さ、やさしさ、勇ましさ、が語られ、銃後の美談が傳へられ共榮圈内の傳説が新に加はり來つた。併し、童話の本質が「夢をもつもの」といふ大事な部面を持つてゐる以上、直接戦闘に取材した話の如き、非常に現實、非常に苦烈なるものはみられない。それでは戦闘に關する話は、全然不可能で、たゞ報導的に戦果を知らせる丈でよいであらうか。

私達は、新聞によつて知り、ラジオで聽

き、映畫でみる以外に戦闘といふものを知らない。私達の知つてゐると確信してゐる戦闘の光景は、夫等體驗しない知識を私達の過去の經驗と想像によつて、でつちあげたものに他ならない。つまり、私達は戦闘を經驗しないものであつて、それを語るにふさはしくないものである。然も私達は夫にも抱らず、戦闘の或る部面を幼児に傳へたいと熱望する。それは、單へに、戦闘を通じて日本に生を享けた喜びを銘記せしめたい、といふ一念があるからである。

「戦争話」と呼稱してよいものかどうかとにかく、或る戦闘を通して、又は或る忠勇武烈なる人を通じて、皇軍のけだかさ、強さ、勇ましさを感じせしめ、皇國に生を享けた喜びを彼等と共に頌け、次代を擔ふ彼等と共に力強く米英撃滅に邁進したい。

私達は此の見地から、少しづつ研究し來つたものである。そして或る時期に於て、幼稚園談話集第二輯に載せるべく支那事變に取材せるもの二三を用意したのであつた。併し用紙の都合で刊行の運びに至らず今日に及んでゐる。そこで今、其の一篇を此處に載せて、皆様方の御指導を乞ふもの

であるが、既に相當の時日を闊してゐるの
で如何にも不適當な例である事を深く恥づ

こても強い西住戦車長

西住戦車長は西住小次郎といふお名まへ
です。お祖父さんがおなくなりになる時、
まだ年の小さい小次郎に、

「お前は一生懸命勉強して立派な軍人にな
り天子様に忠義をしなければなりません
ぞ」とおつしやいました。その御言葉の小次
郎は何時もし忘れないでしつかりと胸の
中にしまつてゐました。

小次郎は、近所の子ども達と戦争ごっこ
をする時はいつも大將でしたが、この大將
は、威張つたり亂暴をしたりする腕白な大
將でなくて、おとなしく、親切で、人をい
ぢめたりしない大將なので、皆はおとなし
か大將といひました。「おとなしか」といふ
のは小次郎の生れた熊本と言葉で「おとな
しい」といふことです。或る日のこと、いつ
もの戦争ごっこの時です。

「戦闘開始!! うわ——」 パーパン
メン。

る次第である。

「あゝ、やられた小さな兵隊さんが倒れ
ました。斥候兵が馳けて来て、小次郎大將
の前で擧手の禮をして、

「大將に報告! 甲斐伍長が敵の捕虜に
なりました。そして直ぐ又いそいでかけて
ゆきました。

「小次郎さん早く来てよう」といふ聲が聞
えます。おとなしが大將は、「よし」といつ
て、鐵砲丸の様に走り出しました。そして、
敵がしつかりと守つてゐる間を、どしどし
勢よく、くどりぬけて、甲斐少年達を救ひ
出しました。

小次郎は、此の様に、ふだんはおとなし
いが、いざとなると強く勇ましい子どもで
した。

大きくなつて、陸軍士官學校を卒業し
て、立派な軍人さんになりました。支那事
變で出征したのは中尉の時でした。雨降る
様に飛んで来る敵彈の中を勇敢に戦車から

他の戦車へ乗りかへたり、クリークの中へ
突き入つたり、勇ましい手柄をたてました。
さて五月十日です。西住中尉達の細見戦
車隊は南京で新しい命令の下るのを待つ
てゐました。そこへ徐州で戦つてゐる我軍
を助けにゆく様になるといふ命令が下りまし
た。皆は大よろこびです。

「いよゝ僕達の腕を振ふ時が来たぞ」
「お互にしつかりやらう」

「今度あふ時は靖國神社だ。あゝ、腕がなる
腕がなる」といつて、戦車に故障のないやう
にと、もう一度よくしらべておきました。

「出發!」勇しい戦車の行列が、廣い
緑色の麥畑の中を、ギーギーと音をたて、
走り出しました。その一番の先頭が西住中
尉の戦車です。地べたに伏せさせて敵を撃
つてゐる歩兵部隊の兵隊さん達が

「戦車、たのむぞお」と手をふつて怒鳴
りました。戦車隊は、兵隊さん達を追い越
し、徐州へ、と進んでゆきました。

その戦車隊の進む上の空には、敵の様子を
さぐる皇軍の偵察機が飛んでゐて、皆さん
がよく繪におかきになるやうな勇しい戦さ
でした。大砲の彈丸がすごい勢ひで破裂

し、機關銃の音は耳がやぶれるかとおもふ様にひびいてをります。

タ、タ、タツ、パン／＼／＼

雨の様に弾はふつてきます。

戦車隊の一番先頭の西住戦車には敵弾が一番多くぞん／＼あたります。けれども西住戦車はそんなことをちつとも恐れず、すんずん進んでゆきます。

「さあもう一息だ、がんばらう」

さうおもつた途端、戦車は急にグダグダと音を立て、停まつてしまひました。

「どうした」。

「こりやいけない、クリークだ」

「なに、クリーク」

戦車の窓から外をながめると前は水の青黒い深さうなクリークです。

「こまつた、どうしよう」

と皆が思つてゐると、

西住中尉はブーツと天蓋をはねのけて、ひとりで戦車からとびおりました。

「中尉殿、あぶない」

皆がさういふ聲も聴かず敵弾が雨の様に來る中をぞん／＼クリークの方に走つてゆきました。中尉はたと、このクリークをわ

たつて進んでゆけば、敵はきつと逃げるにちがひない、どうしても、通れる所をさがさなければならぬ」といふことしか考へてゐないのでした。ヒューツ ヒューツ

西住中尉の戦車帽を敵弾がかすつてゆきました。それでも一生懸命、クリークを右の方へ右の方へと走つてゆきました。けれども通れさうなところがありません。今度は左の方へ／＼と走りまゐりました。敵弾は相變らず中尉の耳や頭のそばをヒューツヒューツといつてとんでゆきます。

かまはず、左の方へ走つてゆきました。

「あゝ、あそこだ、みつかつたぞ」中尉は喜んでクリークの岸を下りて指揮をする旗の棒で深さはかりました。上の方はどろ／＼した泥でしたが底の方は固い砂利でした。

「よしやらう」。

中尉は、皆に早く知らせやうと、勇んでクリークを駆けあがりました。

一步、二歩、三歩、四歩、五歩、……

十六歩、かけ出したその時です。敵の彈丸が西住中尉にあたりました。

「あゝ隊長が、やられた」

「中尉殿、しつかりして下さい」

「大丈夫だ、心配するな。クリークの向ふに敵があるから氣をつけろ。左の方から早く攻撃するんだ」。

傷も忘れて、大きな聲で呼びました。西住中尉は自分のことなんか構はず、たゞ戦車長として、しなければならぬことだけ考へてゐたのです。戦人として、天皇陛下のために忠義をつくすことしか考へてゐなかつたのです。

中尉はたう／＼名譽の戦死をなされました。

この勇ましい働きをなされた西住中尉は、戦の中で大尉になられ、後に立派な金鷄勳章をおいたゞきになりました。軍神西住大尉といつていつまでも、いくさの神様としてあがめられるのです。